

氏名	筒井 久美子
学位の種類	博士(社会学)
報告番号	乙第338号
学位授与年月日	2018年3月31日
学位授与の要件	学位規則(昭和28年4月1日文部省令第9号) 第4条第2項該当
学位論文題目	宮沢賢治・しくじりの軌跡と構造 ——同行する媒介者をめぐる社会学的探求——
審査委員	(主査) 吉澤 夏子(立教大学大学院社会学研究科教授) 小泉 元宏(立教大学大学院社会学研究科准教授) 和田伸一郎(立教大学大学院社会学研究科准教授) 奥村 隆(関西学院大学社会学部教授) 若林 幹夫(早稲田大学教育・総合科学学術院教授)

I. 論文の内容の要旨

(1) 論文の構成

本論文は序章・終章を含め9章からなる。「序章——願いに向かって行く者」では宮沢賢治の生涯を概観したうえで、その「しくじり」を解明するという問題設定と「同行する媒介者」という分析枠組みを記し、「1章 先行研究および理論枠組みの検討」では、宮沢賢治をめぐる文学研究・社会学研究での先行研究を紹介したのち、R.ジラルによる「媒介者」概念などの理論枠組みを検討する。2章から7章は賢治の生涯を継起的にいくつか時代に分けて分析することにあてられており、「2章 共に行く者・とがめる者——2人の媒介者をめぐって」では高等農林学校卒業後の迷走期、「3章 2つの別れの教訓——「正しいねがひ」と「たつたもひとつのたましひ」をめぐって」では友人保阪嘉内との決別と妹トシとの死別、「4章 「よだか」を地上へ返す方法——「銀河鉄道の夜」第三次稿の検討を通して」では羅須地人協会を始めるまでの賢治の思想が扱われる。さらに「5章 農学校教師を辞めさせたもの——花巻農学校教師時代の媒介者たち」では農学校教師時代の現実世界が、「6章 「地人」を目指すのは誰か——羅須地人協会時代の問題構造」では農学校教師を辞め羅須地人協会での活動に打ち込む時代が、「7章 現実世界のファゼーロ——病床と東北砕石工場技師の時代」では東北砕石工場の技師として働くが病に倒れる最晩年が論じられる。「終章——共に行くということ」では賢治の各時代における「しくじり」の構造が「同行する媒介者」という視点から整理し直され、本論文の賢治研究・社会学理論への新たな貢献が確認されたあと、賢治の「最後の手紙」と死のようすが描かれて、本論文は結ばれる。

(2) 論文の内容要旨

宮沢賢治の生涯は「しくじり」の連続としてとらえることができる。高等農林学校を卒業した後3年9カ月もの間、彼は職業と信仰をめぐって迷走し、農学校の教師になるものの4年後には辞職、羅須地人協会を創設して農民の指導に励むが2年半で病に倒れて挫折し、砕石工場の技師となって石灰肥料のセールスに携わるがふたたび病臥、37歳で死去する。このように教師にも農民にも技師にもなり損ね、生涯迷走を続けた賢治は、その「しくじり」のなかで童話や詩などの作品を残すこととなった。

彼の「しくじり」を生起させる（さらには独自の作品を創造させる）契機となったのが、「同行する媒介者」である。賢治は「ぼくらは一緒にもっと幸せにならう」という願いをもち、この願いに向かって「共に行く者」を求め続けていた。本論文は、こうした媒介者が複数存在してその間に矛盾が生まれたり、時期的に他の他者と入れ替わったりする構造から、賢治の「しくじり」の軌跡を説明できるのではないかと、という問題設定のもと、賢治の作品だけでなく、手紙、手帳、周囲の人々の証言などを資料として彼の生活史に迫り、その「しくじり」の軌跡と構造を明らかにすることを目的とする。

1章では先行研究および理論枠組みが検討される。従来の文学研究者による賢治研究には、賢治と妹トシ、親友の保阪嘉内との関係性に言及するものが多いが、賢治が複数の他者との関係を結んでいたこと、それが作品世界とどうかかわったかを論じたものはない。社会的視点から賢治を扱った見田宗介『宮沢賢治』はおもに作品世界を分析し、賢治が自我の絶対化を解体し、他者との関係性を相剋性から相乗性へと再定位する思想に到達したことを抽出するが、賢治が現実世界でどのように「共に行く者」を求め、複数の他者と関係をもったか（そしてその関係にいかにくじったか）を論じてはいない。これは、見田の研究が以下に述べる高農卒業後の迷走期を扱っていないこととも関係する。

本論文では「共に行く者」という視点から賢治の「しくじり」を解明する。この視点にはD.W.プラスが『日本人の生き方』で論じた「コンボイ」概念が参考になるが、本論文ではとくにR.ジラルが『欲望の現象学』で提起し、作田啓一がその太宰治研究で展開した「媒介者」概念を理論枠組みとして採用する。ジラルは、人は自律的・主体的に欲望するのではなく、モデル／ライバルとなる「媒介者」を模倣することで欲望するとし、作田は太宰が「生活者」と「芸術家」というふたつの価値志向を欲望し、それには「とがめる媒介者」と「許す媒介者」がかかわっているとした。本論文はこれらの議論を踏まえ、賢治の価値志向に影響する「同行する媒介者」を抽出することを試みる。

2章では盛岡高等農林学校卒業後の3年半の迷走期を扱う。明治29年に生まれた宮沢賢治は、大正7年3月に高農を卒業したのち職業と宗教をめぐる迷走し、大正10年1月には家出して上京、日蓮主義の在家集団・国柱会を訪ねるが、半年ほどで実家に戻る。この時期、賢治にとって高農での友人・保阪嘉内が「絶対真理」に向けて共に歩む「同行する媒介者」となったが、嘉内は賢治が勧める法華経信仰を受け入れず、故郷に戻って「農人」活動を始める。他方、父・宮沢政次郎は賢治に「社会的成功」を期待するが、賢治はこれから降りて「絶対真理」という価値を政次郎に認めさせようとし、両者の間には葛藤が発生して、政次郎は賢治にとって「とがめる媒介者」となる。賢治は自らにとっての「絶対真理」であった法華経信仰を政次郎に迫り続けるが、父は改宗することはなかった。「絶対真理」を求める方法をめぐって「同行する媒介者」嘉内と決別し、価値志向をめぐって「とがめる媒介者」政次郎と葛藤して、賢治は迷走を続けることになる。

3章では嘉内と妹トシというふたりの「同行する媒介者」との関係を見る。賢治は大正10年7月に嘉内と決別、翌年11月に信仰を共にしていたトシと死別するが、この2つの別れから、「みんな」とともに「みんなの幸」を求めるという「正しいねがひ」（いいかえれば「普遍性」）と、共に「正しいねがひ」を求めようとした「たつたもひとつのたましひ」（いいかえれば「単独性」）とが両立しないという問題を抱え、作品世界で考え続けていた。たとえば心象スケッチ「小岩井農場」には普遍性をめざす「宗教情操」と単独性をめざす「恋愛」が矛盾することが示されており、賢治はこのふたつを両立させる「宗教風の恋」を探求し続ける。この探求は大正15年頃までに書かれた「銀河鉄道の夜」第三次稿において、「みんながカンパネルラだ」という思想（単独者の存在の集まりとして「あらゆるひと

のいちばんの幸福」に至るという方法)に到達する。続く4章では、同原稿に描かれたジョバンニとカンパネラ(つまり「同行者」)の関係を、共に「みんなの幸」を求めながら「ほんたうの幸」への考えが相違して決別した賢治と嘉内の関係を反映しているにとらえ直し、賢治が現実世界の葛藤を作品世界でどのように乗り越えようとしたかが仮説的に示される。

5章では大正10年12月から15年3月までの花巻農学校教師時代が扱われる。この時代の賢治は演劇実践や夜の散歩などの「遊び」という手段によって、農学校の生徒たちという「同行する媒介者」と共に「芸術家」という価値志向へと進むことができ、自身「やり甲斐」があり「楽しかった」と回想している。だが、賢治は突然農学校を退職するという「しくじり」を犯す。これはすでに決別した嘉内が「農人」活動に取り組み帰農したのを見て、教師は「中ぶらりん」で「生温い」と感じ、「本統の百姓」になろうとしたことによると解釈でき、作品世界で描いた「たつたもひとつのたましひ」(=嘉内)と「あらゆるひとのいちばんの幸福」に向けて歩むという方法を、現実世界で実現しようとしたものととらえられる。6章では農学校教師をやめた賢治が羅須地人協会を設立し、農民たちを「同行する媒介者」として生活者と芸術家を統合した「地人」をめざす試みをした時期が論じられる。賢治は農民たちに「芸術」と「技術」を教えて「本統の百姓」へと至ろうとするが、農民たちは「芸術」に興味はもたず、逆に「生活者」を志向して賢治を「とがめる媒介者」となる。作品世界の農民たちの姿を現実世界の農民たちに求めるという「しくじり」を犯した賢治は、「芸術」と「技術」に注力した結果「からだ」の破綻に至り、病臥する。

昭和2年夏から病床にあった賢治は、東北砕石工場工場長・鈴木東蔵の懇意により昭和6年2月に同工場の技師となって働き始める。7章ではこの技師時代が扱われるが、ここで「同行する媒介者」は東蔵であり、農家出身で石灰肥料を販売することで農民の暮らしを改善しようとする彼と共に「あらゆるひとのいちばんの幸福」をめざして賢治は仕事に打ち込む。だが、賢治にとって技師としての仕事は、嘉内とめざした「絶対真理」と比べると「生活者」へと落ちぶれたもののように感じられるものであり、賢治の「からだ」は昭和6年9月に再び破綻して、彼は実家で死の床に就くことになる。

このように、賢治は「同行する媒介者」と「とがめる媒介者」をめぐる同じ布置連関のなかで矛盾や葛藤を抱え、「しくじり」続けてきた。その「しくじり」は時期によって発生する位置を異にするが、賢治が常に「同行する媒介者」を求めたことによる帰結といえる。終章では賢治の生涯の「しくじり」の軌跡と構造を時代ごとに整理するとともに、本論文による新たな知見を確認する。

従来の宮沢賢治研究に対して、本論文は賢治が現実世界において複数の「媒介者」との関係性を結んだことに着目し、彼が「同行する媒介者」と共に「正しいねがひ」を求めようとしたことによって繰り返し「しくじり」を犯したこと、その現実世界における「しくじり」が作品世界における彼独自の思想的創造とダイナミックな関係にあることを明らかにした。また、社会学研究への貢献としては、従来の「媒介者」概念に次の3つの視点を付

け加えたといえる。第一に、従来の媒介者概念が主体よりも上位にあるモデル／ライバルを想定するのに対して、「同行する媒介者」は主体と対等な関係に近く、媒介者が主体の欲望を媒介するだけでなく、主体が媒介者の欲望を媒介するという役割交代が起こったり、互いが互いの欲望を媒介し合う相互媒介関係が発生したりする（迷走期の賢治と嘉内の関係がその例である）。第二に、本論文はある主体にとって複数の媒介者が存在し、矛盾し合うという視点を提起しており、「同行する媒介者」（たとえば嘉内）と「とがめる媒介者」（たとえば政次郎）が葛藤するという事態を明らかにした。そして第三に、複数の媒介者が時間的に継起していくという視点を導入しており、プランスが成熟を論じて「重要な他者」概念に「時間の奥行き」を付け加えたのと同様に、「同行する媒介者」概念によって媒介者概念に「時間の奥行き」を付け加えることができた。ただし、「同行する媒介者」の多様性や両義性、濃淡などを精緻化し、この概念を立体化する作業は、本論文の先に開かれた今後の課題である。

終章最終節では賢治が死の 10 日前に書いた生前最後の手紙が検討され、そこで自らの「慢」に「しくじり」の要因を求めていたことが指摘される。臨終の日（昭和 8 年 9 月 21 日）、賢治は政次郎に妙法蓮華経を 1000 部作成・配布するよう遺言したが、これを聞いた政次郎は初めて賢治を褒め、その死後遺言通り経を作成・配布して、のちに日蓮宗に改宗した。「とがめる媒介者」だった父・政次郎は、こうしてついに賢治の「同行する媒介者」となったのである。

Ⅱ. 論文審査の結果の要旨

(1) 論文の特徴

本論文は宮沢賢治の作品、手紙、手帳、周囲の人々の証言などを資料として網羅的に検討し、その現実世界における「しくじり」と作品世界における思想的展開の関係をダイナミックに解明しようとしたところに特徴をもつ。この解明のために本論文では「同行する媒介者」という概念が採用され、賢治の生涯において複数の媒介者が時期的に継起したり、矛盾・葛藤したりするありさまが一貫した枠組みで分析される。これによって宮沢賢治という文学者・思想家について従来の研究にはない理解が可能になるとともに、R・ジラールが提起した「媒介者」概念を理論的に深化させることができ、「文学」をめぐる社会学的研究の新たな可能性を開くことに成功している。

(2) 論文の評価

本論文にかんする審査会は2017年6月15日に第1回、11月9日に第2回が開催された。第1回審査会では大幅な修正が要求されたが、修正稿に基づいた第2回審査会では博士論文として十分な水準に至ったとの評価がなされた。その後12月14日の公聴会・最終審査会までにおもに終章が書きかえられたが、これにより論文全体の一貫性が高まって焦点が格段に明確になり、予備審査、本審査、公聴会という一連のプロセスで修正要求を受けて論文の水準が飛躍的に向上したケースとして、申請者の対応力と努力が高く評価される。

本論文の内容について、審査委員会では以下の点に高い評価が与えられた。

第一に、本論文が宮沢賢治という文学者・思想家をその作品世界だけでなく、彼が現実世界をどう生き、そのなかで作品世界がどう生まれたかをダイナミックに解明した点である。本論文は父・政次郎、妹・トシ、友人・保阪嘉内、農学校の生徒、碎石工場・鈴木東蔵など、多くの他者と賢治の関係をとらえようとして、童話や詩作とともに手紙（他者とのコミュニケーションの手段である）、手帳へのメモ、関係者の証言などの一次資料を網羅的に検討する。これらの資料を整合的に理解することはきわめて困難な作業だが、本論文は現実世界における「しくじり」に焦点を置くことで、この理解に成功している。現実世界で他者との関係に「しくじり」、それを乗り越える方法を作品世界のなかで見出し、それを現実世界で実現しようとする新しい「しくじり」が生まれる。本論文は、作品世界よりもむしろ「しくじり」を解明しようという問題設定を採用することにより、現実世界と作品世界（その思想的な「成功」）のダイナミックな往復をこれまでにない形で解明するものであり、宮沢賢治という不気味さをもった文学者に新たな光を当てたことが高く評価される。

第二に、その「しくじり」を「同行する媒介者」という概念を枠組みとすることで一貫して分析しきった点である。R・ジラルールの「媒介者」概念は模倣されるべきモデル／ライ

バルを指し、これを展開した作田啓一の「とがめる媒介者」「許す媒介者」も主体に対して上位にある他者を指しているといえるだろう。これに対して本論文は「同行する媒介者」という対等な位置に近い他者を焦点に据え、これを賢治がどのように求め、どうしくじったかを理解しようとする。この枠組みによって、賢治が「同行する媒介者」としての保阪嘉内と「とがめる媒介者」としての父・政次郎という複数の他者のあいだで葛藤していたこと、「同行する媒介者」を時期によって嘉内、農学校の生徒、鈴木東蔵といったように入れ替えていったことなどが明らかになり、賢治が他者との同じ布置連関の「構造」のなかで生涯繰り返し「しくじり」を犯したことを鮮やかに分析することに成功している。たとえば見田宗介の『宮沢賢治』は賢治の作品世界を美しく理論化したものだが、本論文は賢治の現実の「しくじり」を泥臭く描いていくという鉅脈を発掘した「個人の系譜学」とも呼べる成果であろう。

第三に、以上の分析枠組みを精練する過程で、「同行する媒介者」という概念そのものに深化が見られた点が評価される。「同行したい」欲望とは「共に行く」ことを強要するような、いわばマゾヒスティックな傲慢さを含むものであり、それを「みんな」に求めることはほぼ成功しようがない試みだといえよう。本論文は修正の最終段階で終章に加筆されたように「同行する媒介者」の複雑な諸位相を明確に分別して描ききるとともに、この概念がもつ展開可能性を開いたものといえる。たとえばブラスは「コンボイ」概念によって重要な他者に時間的奥行きを与えて「成熟」を論じたが、賢治が「同行する媒介者」を断念することができず生涯それを求め続けたことは、彼の「未成熟」を説明する仮説ともなるだろう。また、本論文は時期的に継起する複数の媒介者をフラットに描くことで賢治の「しくじり」を解明することに成功したが、保阪嘉内と父・政次郎がそのなかでも決定的な意味をもつ特権的な「媒介者」であり、彼らとの間の「しくじり」が賢治に同行欲望を持ち続けさせたという解釈も成り立つ。このような「媒介者」の多義性・両義性、濃淡を立体的に描くことは、本論文の次のステップにある課題として指摘できるが、本論文の到達水準によって新しく開かれたものであることはむしろ評価すべき点としてあげておきたい。

第四に、本論文は「文学」をめぐる社会学の新しい可能性を開拓したものとして評価できる。「文学の社会学」には階級・階層的な下部構造やジェンダー的な関係性から作品を理解するといった研究があげられるが、本論文は「文学者」によって生きられた他者との関係性と創造された作品世界の往復をとらえようとする。公聴会での質疑応答において申請者は今後の仕事として「文学者の社会学」をあげ、文学者がそうではない人々と共に生きていくなかでどのように世界との葛藤を抱えるかをとらえたいと述べ、具体例として夏目漱石とその弟子たちというテーマを示したが、社会のなかで「文学者する」とはいかなることかを解明する独自の研究構想に近づいているといえるだろう。これはこれまでの「文学社会学」の成果を踏まえる必要があるとともに、近代社会において文学・芸術・アートとはなにを意味するかというより広い文脈の検討を要請する課題である。本論文自体はこ

うした近代社会論やより大きな構造的文脈の分析には到達していないが、こうした課題が次に開かれている。

以上の 4 点には申請者にとっての今後の課題も含まれるが、初発の問いを手放さずに探求しつづけ、最終的にここまでの水準に辿り着いたことに審査委員全員は最大級の評価を与えるものである。本審査委員会は本論文の学問的価値を高く評価し、全員一致で申請者への博士号授与を可とするものと判断する。